

使用できない小径マツが10本枯死するなど、被害が拡大する傾向にある。

この地域の動物で、最も目につくのはカモ、カモメ、ウ等の鳥類である。ウの中で、海鵜は鵜飼で使われることで知られるが、冬鳥として渡ってきて、夫婦岩周辺の岩礁地帯に数多く見られる。鳥類では他にコアジサシ、シロチドリ、タカ類のミサゴ、サンバ等が見られるが、近年は個体数が激減している。

一方、二見浦には、三重県のレッドデータブックに記載される希少種の昆虫類や貝類も生息するが、水質の変化や堤防の存在などで、その生息域は狭められている。

2 歴史的環境

二見浦は、古い歴史につつまれた地域であるが、歴史書にみえる「二見」の初見は、『太神宮諸雑事記』聖武天皇の天平3年(731)6月18日の二見郷長石部嶋足いそべしまたりにかかる記事である。石部氏(磯部氏)は海女族と言われ、興玉神石を海神として祀った。興玉神石は、今は夫婦岩と呼ばれている立石から6町(約660m)ほどの沖にあり、干潮時には岩頭を現していたが、安政元年(1854)の安政東海・東南海・南海地震で海没したと言われる。

二見浦が日の出の名所であることは、磯部氏の太陽信仰によるとされる。この磯部氏に祀られている太陽神の天孫降臨を猿田彦大神が迎えたということは、伊勢神宮が五十鈴川の川上への鎮座のとき、猿田彦大神の孫・大田命が迎えに出た話と関係がある。興玉神石は海の沖魂神であった。この神は夏至の日には、はるか東のかなたにある常世国から、海を照らして寄り来る神、すなわち海照大神あまてらすおほかみであるが、立石(夫婦岩)の沖の興玉神石に寄りついて誕生している。

しかし、二見浦が歴史・文学の世界で語られるのは、平安時代初期以降の和歌等の文学作品においてである。紀貫之等とともに『古今和歌集』を撰じた凡河内躬恒おうしこうちのみつねは、延喜21年(921)頃の成立とされる『躬恒集』の中で、

玉くしげ 二見の浦に すむあまの わたらひぐさは みるめなりけり

と、二見の浦には海人が住み、その生計の種は海草であったと二見浦を詠んでいる。

都からみる伊勢の海は、二見浦に限られたことではなく、敦忠朝臣は、醍醐天皇の雅子内親王が承平元年(931)に斎王に卜定されたとき、彼女への思慕を

伊勢の海の 千尋の浜に 拾ふとも 今は何てふ かひかあるべき (後撰和歌集)

「伊勢の海の広い浜で貝を拾おうにも一つも貝が拾えないように、あなたが伊勢の斎王にお決まりになってしまった今となっては、いくらお慕いしても、かいないことだと悲しんでいます。」と、内親王への思いを嘆じている。

この歌に詠われている「千尋浜」は、時代が下れば二見浦の神前付近の海浜を示すようになる。

同じく『後撰和歌集』に採られた少将内侍の歌で、伊勢斎宮への勅使として下向した藤原兼輔が、都に戻ってから自分のもとを訪ねないことを恨んで詠んだ、

人はかる 心のくまは 汚くて 清き渚を いかで過ぎけん (後撰和歌集)

の「清き渚」は、伊勢の海でも後世特に二見浦をさすようになる。

また、「清き渚」を詠ったものとしては、『催馬楽』の歌が有名である。

伊勢の海の 清き渚は しほがひに なのりそや摘まむ 貝や拾はむ 玉や拾はむや

この後も、平安時代を通じて『金葉集』『林下集』『千載和歌集』『新古今和歌集』などの歌集にも二見浦を詠った和歌が撰じられており、「清き渚」は伊勢の海を代表するものとなっていった。

平安時代末期から鎌倉時代の初期に諸国を行脚し、自然を友としてたくさんの歌を詠み、『新古今和歌集』に個人として最高の94首も入首し、当代随一の歌人とされていた西行法師は、晩年の治承4年(1180)ごろから文治2年(1186)まで二見に庵を結んでいる。

西行の庵は、二見の安養山にあったことが知られ、平成4年に発掘調査が実施された安養寺跡が、その所在地と推定される。文治2年(1186)の晩秋、『方丈記』の著者としても知られる鴨長明が、この庵を訪ねているが、同年初秋に西行は奥州に旅だっており、二人の逢いは実現しなかったと伝えられる。

西行は、東大寺大仏の再現勧進のため、伊勢国を離れるまで6年余を二見で過ごし、この地で詠んだ歌が『山家集』に収められている。

思ひきや 二見の浦の 月を見て 明暮袖に 浪かけむとは

今ぞ知る 二見の浦の 蛤を 貝合せとて おほふなりけり

二見浦には、西行や鴨長明以外にも女西行とも云われる後深草院二条などの来訪も伝えられ、後鳥羽院、藤原定家、慈円、源実朝などの歌人も二見を詠っている。

江戸時代には、『奥の細道』等の句集をなした俳人松尾芭蕉が奥の細道の旅を終えた元禄2年(1689)9月に、伊勢参宮の旅に出て、

蛤の ふたみにわかれ 行秋ぞ

と、貝の蓋と身、二見浦をかけて、再び友人たちと別れ別れになる切なさを詠い、二見を訪れてからは、

硯かと 拾ふやくぼき 石の露

と、西行の昔を偲んで、くぼい石を見出して、西行の硯のなごりではないかと思わず取り上げて詠ったりしている。

江戸時代は、中世に一度衰えた和歌が世の太平に伴って復活した時代であり、その担い手となったのは国文学者たちである。松坂に鈴屋を構えた本居宣長は、

あかねさす 日影と富士の 白雪と 二見の浦の 朝明けの空

と、6月の夏至のころに、日の出がちょうど立石の間から昇り、晴れた日には富士山も遠望される茜色に染まった二見浦の朝明けの美しい情景を詠んでいる。

また、時の漢学者、『本朝通鑑』を著した林春斎、伊藤東涯、頼山陽なども漢詩を遺している。

近代以降の二見浦は、国内有数の保養地、観光地として一躍脚光を浴びるようになる。そのきっかけとなったのは、日本初の海水浴場の開設であった。明治15年(1882)、内務省衛生局長であった長^{なが}与^よ専^{せん}斎^{さい}の勧めにより、健康促進に効能の高い冷浴と温浴から成る海水浴が行われ、明治17年(1884)には隣接する二見浦の砂浜に場所を移して本格的な海水浴場が開設された。

明治20年(1887)には英照皇太后(明治天皇嫡母)、同24年(1891)には皇太子嘉仁親